

母の「SST」で効果

児童虐待止まった

DV被害 心理サポート

児童虐待を防ぐために母親の対人コミュニケーション技術を訓練するプログラム「SST」が、大阪の母子生活支援施設で効果を挙げている。全国の母子施設では夫からの暴力(DV)などで精神不安定に陥り、虐待に及んだりする母親が増加しているが、訓練により自立への足がかりをつかむ入所者も出始めた。母子施設が母親を対象に実施するのは全国的に珍しく、専門家は「今後、他の施設にも広がっていくだろう」と期待を寄せている。

大阪の支援施設

SSTに取り組んでいるのは、大阪市東成区の母子生活支援施設「東さくら園」。昭和47年に開所し、DVを受けたり、経済的に困窮したりした母子世帯を

SST(ソーシャル・スキルズ・トレーニング、社会技能訓練) 精神障害者の自立を促すための認知行動療法。平成6年ごろから普及し、ここ数年の間に医療機関だけではなく矯正施設の入所者や小中学校の子供たちを対象が広がっている。数人のグループで行われ、インストラクターの質問に答えて意見を述べたり過去の失敗体験などを振り返ったりしながら、人とうまくつきあうための考え方や行動のトレーニングが行われる。

たという。

このため、母親への専門的な心理サポートが不可欠と判断し、昨年からSSTを取り入れた。昨年は全5回のプログラムを2回実施したところ、参加者12人の多くで虐待が止まったり、就職に意欲が持てたりするなど効果が表れた。インストラクターの藤木美奈子さ

「どんな考え方をすれば自分が楽になるかが分かりました」。昨年プログラムを修了した元看護師の女性(34)は自分の内面の変化を実感し、就職活動を始めるまで回復したという。

26歳で結婚、直後に夫の暴力が始まった。28歳ごろから精神科に通院、薬が手放せなくなり、まもなく退職した。病状が回復し始め

ん(49)は「虐待を個人の資質と切り捨てるのではなく、成育環境や価値観を見つめ直して行動を変えるところで克服できる」と強調する。

精神不安定な母親の支援は全国の母子生活支援施設でも課題となっている。財団法人「こども未来財団」が平成19年に約250施設

を対象に行った調査では、入所している母親の約半数がDV被害体験があり、このうち約4割で子供への虐待があった。母親と子供のそれぞれ約15%が心身に障害を抱えていたという。

SST普及協会役員で奈良教育大学特別支援教育研究センターの岩坂英巳教授(47)の話「DVなどで自信を失った母親が社会的スキルを身につけて自信を取り戻せば、子供にもいい影響があり、効果が期待される。インストラクターが確保できれば他の施設にも広がっていくはずだ」

元看護師自立へ「内面の変化実感」

「33歳のときに離婚し、0〜7歳の子供3人と一緒に東さくら園に身を寄せた。周囲に気を使い、仲良くなれない人がいるとストレスを感じ、夫の暴力を憎んでいたのに子供が言う通りにはしないと手をあげることがもあつた。そんなときは自分を責めて落ち込み、感情のコントロールができずにまた薬に頼った。」

SSTでは自分の長所や欠点を語り、他の参加者とも意見を述べ合った。自分の考え方の根本にある価値観を考えるうちに、自身を客観的に見られるようになり子供に手をあげることもなくなったという。女性は「人とかかわる仕事はもうできないと思うっていたけれど、今は自分にもまたできると思えます」と話した。